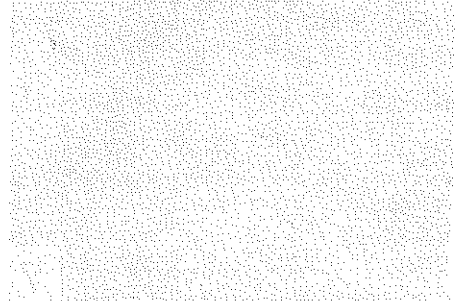
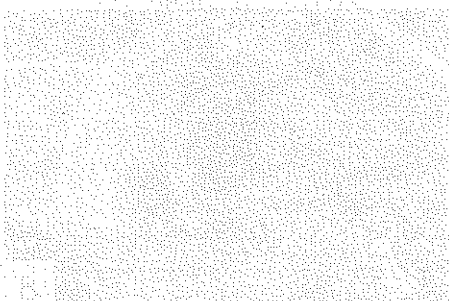
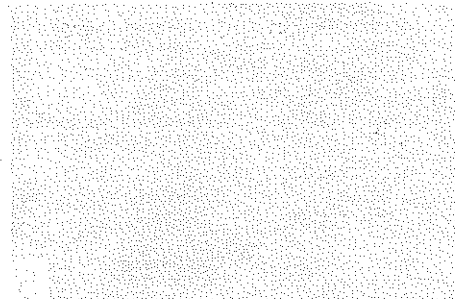
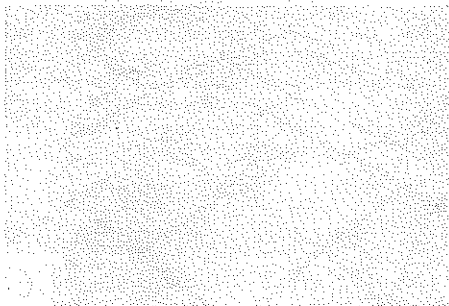


経過：投入3日後には大部分の葉部に食痕が見られ、17日後には葉部はほとんど残っていなかった。次に食害をさける意味で、網目の長径2cmの金網でカバーをつけ再度投入した(10月3日)。食痕はみられなくなったが、ほとんどの葉部は先端から淡褐色に枯れはじめ、緑色部分は葉鞘から2cm内外を残すのみとなった。この状態は124日後現在も同様で、その間おちついている状態にある。根茎については予め覆っていた砂が流されて水中にむき出しになってしまったり、逆に漂砂で埋ったりしているが、ここで4ヶ月以上にわたる室内実験(一方は根茎を砂中に入れ、他方は海水だけ)によると、両者の生育状況に特別の差はみられずに生育していた事から、そのままの状態で生長期にかけて“根つき”、伸長等の様子を観察していく事にした。

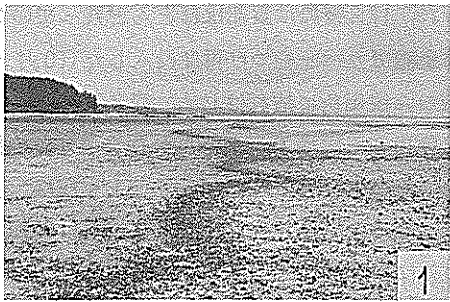
4. ま と め

以上の試験調査をまとめると次のようになる。

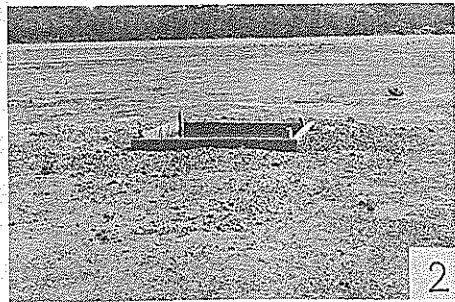
- 1) アジモは干出すると枯れ、流れの速いところでは根茎が露出し定着できない。
- 2) 干潟での試験では、定着については有効であるが、広がる様子はみられなかった。掘削後のモ場の復元について、昭和46年9月に行なった観察でも一年以上かかった事から広がる速度は速くない。したがってさらに観察を継続する必要がある。
- 3) 礁湖では食害がある。防止網を施した場合にも葉部の先長はみられず、かえって萎縮した。この原因は現段階では不明である。
- 4) 礁湖でのメッシュによる移植方法は人手に依存するため、広域モ場の造成方法としては非能率的であり、有効な方法ではない。



図版Ⅱ



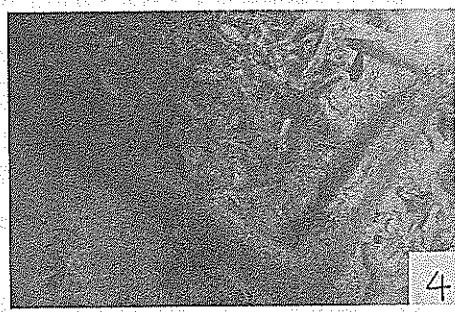
タイドプール中のアジモ場



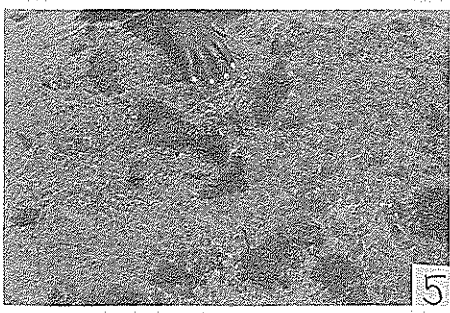
干潟中の掘削池



掘削池に移植したアジモの生育状態



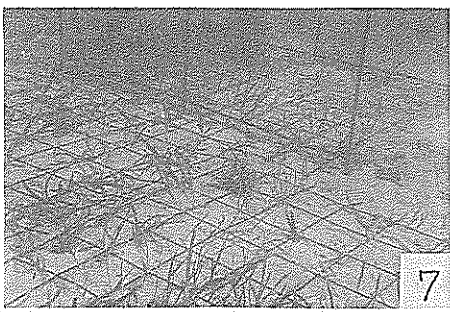
沖側に配置したアジモの生育状態



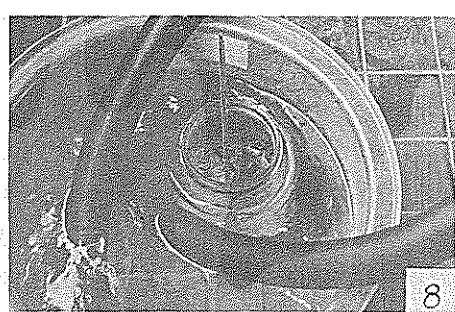
掘削水路に移植したアジモの生育状態



礁湖に投入したアジモの生育状態



食害防止金網の設置状態



低温水中の生育実験